（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　　農　学　　）	氏名	安　岡　健　一
論文題目	戦時・戦後の農業問題と人の移動に関する政治社会史的研究 ―在日朝鮮人農民・疎開帰農者・「満州」開拓農民―		

（論文内容の要旨）

本論文は、戦時・戦後期の日本における農業問題と人の移動との関係を、京都地域を対象として，歴史資料に基づき分析したものである．従来の研究では,日本農民はイエとムラという強力な社会的結合を基盤にして長期定住するものとしてイメージされており、「満州」移民などごく一部の問題領域以外ではほとんど注目されてこなかった。しかし実際には、定着する農民とは別に、多くの人々が農業への参入を試み、あるいは農業からの撤退を余儀なくされ流労を重ねたという事実がある。そして、このような動きが集中的におこったのが1940年代すなわちアジア・太平洋戦争とその直後の時代であった。本論文はこれらの移動する農民たちに注目し、かれらの性格や運動とかれらを生み出した諸条件および政策側の対応などを相互関連的に明らかにしたものである。分析の対象は、植民地朝鮮からの内地農業部面への参入、戦時末期の疎開入植者たち、「満州」農業移民の戦後緊急開拓への再動員である。

第一章では、植民地出身である朝鮮人が1920年代以後農業労働者・農業研修生などの形態で日本農村に定着しはじめたこと、さらに戦時体制期には日本農民が脱農傾向を強めるのと対称的に小作農民になるものが続出したこと、および末期には農地所有権を獲得して自作農化するものもあらわれたことを明らかにした。加えて、戦後には大半の朝鮮人農民は故国か都市部へと移動するが，残ったものは農地改革で自作化し農民として定着するという事実を明らかにした。

第二章では，戦時期の疎開政策による帰農者をとりあげた。疎開は戦時末期には戦災と併せて都市人口を半減させるほどの大規模なものであり、政策の側はかれらが積極的に農業に参与し食糧増産の一環を担うことを期待した。本章では、かかる疎開開拓者の一員であった元プロレタリア作家貴司山治の日記を資料として、疎開を通じ入植を志す過程、および戦後も疎開先に留まり開拓農民運動の組織者となっていく過程を明らかにした。

第三章では、戦後緊急開拓政策を取り上げた。「満州」開拓農民たちは敗戦後日本へ引揚げてくるが，その殆どは故郷に戻ることができず，約四割の人びとが戦後開拓政策に従い再び日本各地へと入植を遂げていった。とくに戦時中に急拡大した軍用地はその主要な受け皿になった。本章では、この再入植過程が戦後日本社会における引揚者差別とそれに対抗する引揚者たちによる「国民」として平等の扱いを求める社会運動のなかから選びとられたものであることを，地域社会運動史の蓄積を踏まえて明らかにした.

本章とは別に補章をもうけ、これに続く時代すなわち1950年代における海外農業移民の政策化過程を分析している。これまでの当該研究は、もっぱら外務省資料しか使われてこなかったが、新たに農林省サイドの検討を加えることによりその全体像を明らかにし、「満州」開拓・戦後開拓に携わった農林官僚の意向が強く反映されたものであることを検証した。

注）論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は１頁を３８字×３６行で作成し、合わせて、３，０００字を標準とすること。
論文内容の要旨を英語で記入する場合は、４００～１，１００wordsで作成し
審査結果の要旨は日本語５００～２，０００字程度で作成すること。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

これまでの日本農業史研究は、イエ・ムラという土地に結びついた強力な社会結合に支えられた定着性の高い農民像を前提にする傾向が強かった。これが西欧ともアジアとも異なる日本農業の顕著な特色であったからである。しかし現実には、移民・入植や既存農業への参入、さらにはその挫折と再移動などの大きな動きが常時随伴していた。また1930年代以降には、「満州」への内地農家100万戸の移住が国策として実行に移される一方、労働力不足にあえぐ内地農村には大量の朝鮮人労働力が迎え入れられるという事態も生じた。

本論文の意義は、これまでその実態的重みにふさわしい学問的関心が寄せられてこなかった「移動性・流動性の高い農民」に照準をあて、これら周辺的農民存在の側から近現代日本農業史像を豊富化したところにある。とくに「移動する」もしくは「移動せざるをえない」農民が大量に発生したアジア・太平洋戦争前後の時期に注目して詳細な実証分析を行い、幾多の新知見を明らかにした。さらにこれらの諸事実に対する農村社会の受けとめ方および為政者の対応を丹念に考察することにより、当該期日本の農業・人口問題の歴史的性格を、都市・農村双方を含む国土規模の広がりと、植民地朝鮮から「満州」に至る日本帝国圏の広がりにおいて総合的・動態的に解明した。

評価すべき点は以下のとおりである。

第一は、「農における移動」および「日本農業問題における移動農民たち」という重要な論点の存在を明示的に示したことであり、かかる視角から従来の研究が把握できなかった史実や問題の構造を明らかにしたことである。分析対象に「日本農業に参入した朝鮮人たち」「戦時末期の疎開帰農者たち」「戦後内地開拓へ再入植した「満州」農業移民たち」を取り上げたが、これら一つ一つが、実態解明を求められていた研究テーマであり、具体的分析を積み上げた功績は大きい。1940年代日本農業像に新しい視野と史実を付加するとともに、国境で厳密に区切られてきたこれまでの一国史的農業史像を「移動する農民」の側から相対化したものとして評価できる。

第二は、植民地期朝鮮から内地農業へ大量の参入があったという事実を明らかにしたことである。かれらの多くが脱農傾向を強める日本人農家にかわり小作農となり、さらに一部は農地所有権を取得して自作農になった。これらは戦時体制末期の最高機密とされ公の知るところではなかったが、農政担当者は極めて深刻に受けとめその動向を注視していた事実を明らかにした。イエ・ムラを柱とする日本の農業システムが急速に崩壊し朝鮮人農家に代替されるという事態すら発生していたという史実を発見したことは重要であり、戦時末期の農業と農政に関するこれまでの理解に対し大幅な修正を要求するものである。

第三は、「満州」農業移民が敗戦後再び内地開拓地に入植するに至る過程を具体的に明らかにしたことである。本研究は、引揚者を迎える日本社会と送出した母村の対応姿勢、これらに対して引揚者が取り組んだ諸運動、かかる状況に対する政策担当者の対応などの相互関係として重層的に分析し、極めてダイナミックな過程として明らかにした。とりわけ、大きな困難が想定されていた内地への再入植をかれらが主体的に選び取るうえで、天皇行幸と天皇の声かけが決定的な力になったという注目すべき史実を明らかにした。

第四は、疎開を契機に開拓地に入植した、疎開帰農者という存在を具体的に明らかにしたことである。伝統村落とは無縁のところから農村社会の一員になると

ともに、戦後に至っても農業と農村の利害を代弁し主張し続けたかれらは、農業や農村の意味を国民的レベルで討議されることが求められている現代にとって、参照するにたる歴史的経験である。

第五は、第二次世界大戦前後をめぐる時代区分論に対し、「移動する農民たち」の目線から一つの考え方を提示したことである。これは前後二つの時期を連続的にとらえるのか断絶性を強調するのかという論争であるが、近年は、おもに経済構造という視点から連続的に把握する見解が優勢であった。しかし「移動する農民たち」にとって、終戦は戦時期に選びとった途をすべて無効にする大画期であったことを鑑みれば、いわゆる連続説は抽象度が高すぎ社会経済史総体の時代区分論としては妥当ではないとの見解を提示した。ミクロ視点・主体視点からの時代区分論の試みとして評価できる。

以上のように、本論文は「移動する」もしくは「移動せざるをえなかった」農民たちに照準をあて、かれらの存在形態と社会的性格を解明することにより、近現代日本農業史の研究水準を大きく飛躍させたものであり、農業史・開拓史・人口史・政治社会史および東北アジア史に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成２３年７月２１日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。

注)Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公開可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降